幻の「高麗尺」？発見

山形・米沢市古志田東遺跡　　３.５㌢刻みの目盛り

山形県米沢市の古志田東遺跡（九世紀半ばから十世紀初め）から出土した木製の物差しの断片に、二種類の目盛りが表裏に刻まれてあり、片側の尺度が朝鮮半島から伝来したとされる高麗尺（こまじゃく）系統の物差しの可能性もあることが八日までに、同市教委などの調べで分かった。高麗尺は八世紀初めに律令政府が廃止を決めてから使われていない「幻の尺」とされ、これまで国内で見つかった例はない。

出土した物差しの断片は、長さ九・五㌢、幅一・四㌢、厚さ〇・七㌢で、裏表に寸と分が刻まれている。一方は一寸が三・一二㌢、もう一方は一寸が三・五㌢と、異なった尺度が刻まれている。

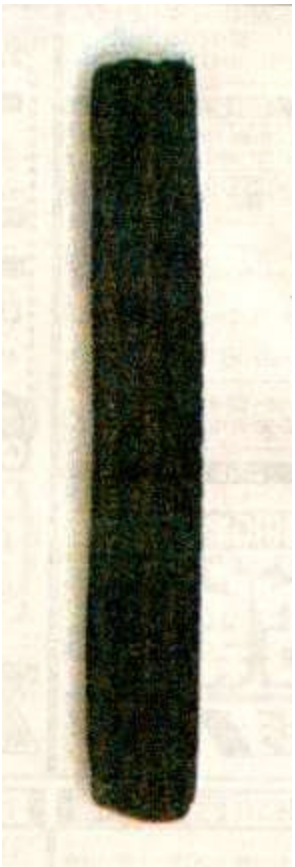
市教委の依頼でこの物差しを調べた東北芸術工科大学の宮本長二郎教授（建築史）によると、三・一二㌢の尺度は七世紀に中国から伝わった唐尺（からじゃく）の系統。唐尺と高麗尺の比率は一対一・二で、今回見つかった物差しの比率は一対一・一二と微妙に異なる。しかし、宮本教授は「三・五㌢の方は六世紀に朝鮮半島から伝来した高麗尺の可能性がある」と話している。

律令政府は尺度を統一するため、七〇一年の大宝令で建物建築には唐尺を使うように定め、その後、高麗尺は廃止されて使われなくなったとされる。また、これまで国内で高麗尺の出土例がないことから、高麗尺の存在そのものを否定する見方もある。

岩田重雄・日本計量史学会会長の話

裏表に二種類の違った目盛りが記された尺は、これまでは江戸時代初期のものが一番古く、非常に珍しい。しかし、比率や時期を考えると、平安時代に成立した漢和辞典「和名類聚抄」に記された和裁用の「竹量（たかはかり）」の可能性もあり、（高麗尺かどうかは）遺跡から見つかった柱と柱の間の長さを計測するなどして慎重に分析する必要がある。

高麗尺　東魏尺（とうぎじゃく）ともいう。本来、中国東魏の孝静帝の天平三年（五三六年）に制定されたもので、一尺の長さは三十五・六㌢。日本には朝鮮半島の高句麗を通じて伝わり、大化改新以前はもっぱらこの尺度が使われたとされる。



「高麗尺」と同じ目盛りがあった断片。左側に目盛りがある。＝山形県米沢市で

（朝日新聞　１９９９．９．８　夕刊　２２面　３版　一部加工しました